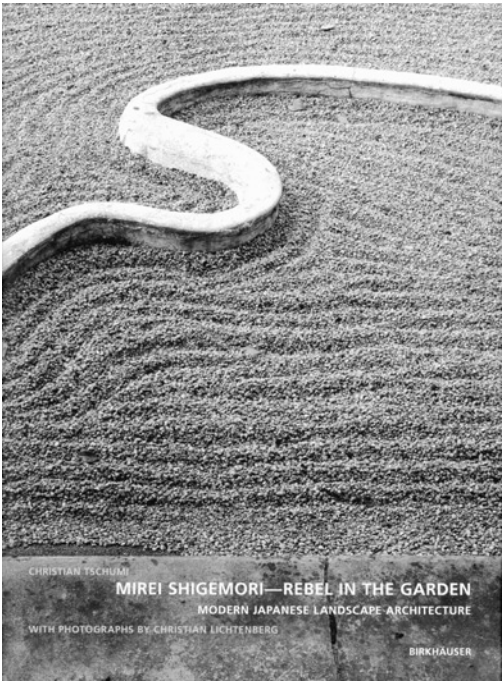
＜書　評＞

Tschumi, Christian (2007)

Mirei Shigemori－Rebel in the Garden: Modern Japanese Landscape Architecture.

With photographs by Christian Lichtenberg.
(Basel, Switzerland: Birkhauser, 203pp.)

橋　内　　武



＜重森三玲の生涯と作品についての著作＞

作庭家・重森三玲の生涯と作品

本書は日本庭園に新境地を切り開いた作庭家・重森三玲（1896～1975）の生涯とその作品に関する本格的研究書（英文）である。重森三玲への評価は近年つとに高まっていることは，ＮＨＫテレビ番組「ふるさと発スペシャル庭づくりは人づくり――作庭家　重森三玲が残したもの」（2006年12月22日放送），東京（松下電工汐留ミュージアム2006年10月７日～12月10日）と静岡（静岡アートギャラリー，2007年10月６日～11月18日）での展覧会「生誕110年重森三玲の庭――地上の小宇宙」に加え，下記の出版物が次々に上梓されていることからも明らかだろう。

- Tschumi, Christian（2005）*Mirei Shigemori――Modernizing the Japanese Garden.* With photographs by Markuz Wernli Saitō. Berkley, California: Stone Bridge Press.
- 溝縁ひろし（写真）（2007）『重森三玲――永遠のモダンを求めつづけたアヴァンギャルド』（シリーズ　京の庭の巨匠たち１），京都・京都通信社。
- 重森埶氐（監修）／大橋治三（写真）ほか（2007）『重森三玲――モダン枯山水』，東京・小学館。
- 中田勝康（近刊）『三玲の庭100選』（仮題），京都・学芸出版社。

いずれも写真をふんだんに用いて三玲がデザインした庭園を紹介してはいるが，研究書に類するものではない。その点，本書 Tschumi（2007）は，縦34㎝，横25㎝の大判203頁という英文の大著である。その内容は，以下に紹介する通り，三玲の生涯と作庭について膨大な文献の渉猟と現地調査（関係者への聞き取りや庭園の実地観察）による研究によっている点で，高く評価されるべきものである。

著者はスイスの作庭家であるが，重森三玲に焦点を当てて日本庭園の近代化についての学位論文を書いて，京都大学大学院より博士号を得た研究者でもある。前著 Tschumi（2005）が三玲の庭を順に従って東福寺八相庭（1939）から松尾大社庭園（1975）までの10庭を英文で紹介したものであるのに対して，本書はその生涯と業績を日本庭園史の中で的確に考察し，評価

した研究書である。

本書は，4氏によるまえがき（Prefaces），生涯と影響（Life and Influences），再興のための方略（Strategy for Renewal），庭園（Gardens）の4部から成り立っている。まえがきが4本（そのうち，著者自身のものは最後に来ている）もあるというのは，やや異例だと思われるが，対象とする作庭家が海外にはほとんど知られていないため，著名な庭園研究者3名に執筆を依頼することによって本書を権威づけしようという狙いがあると思われる。以下掲載順に列挙する。（題目の訳語は橋内。）

・Christophe Girot, “The Spirit of the Rocks”（石の心）
・Gunter Nitschke, “Concept Gardens”（概念庭園）
・Kendall H. Brown, “Mirei Shigemori and Modern Japanese Artistic Creation”（重森三玲と近代日本の芸術的創造）
・Christian Tschumi, “Rebel with a Cause”（主義主張のある反逆者）

このうち，Girot氏はチューリッヒの連邦技術専門学校教授（造園学），Nitschke氏は，東アジア建築・都市研究所所長（日本庭園史），そしてBrown氏はカルフォルニア州立大学ロングビーチ校教授（美術史）である。

では，本書の要点を紹介しておこう。三玲は，「永遠のモダン」を主張した。それは古庭園の形式を真似るだけの庭作りの否定であると同時に，日本の文化的土壌を顧みずに西洋庭園を模倣するモダニズムの否定でもあった。三玲が選んだのは第3の道，すなわち伝統に学びながらも常に革新に挑むモダニズムであった。「主義主張のある反逆者」と言われるのには，2つの理由からである。1つには作庭を親分子分の職人芸から解放し，芸術的創造の営みとしたこと，2つには日本庭園の精神上のルーツである岩磐・岩境を再発見したことである。だから，三玲の庭には枯山水が多い。

三玲の生涯についての記述は，三男の重森埶氏が『重森三玲――モダン枯山水』（pp.146～151）の中で書いているが，第3者であるTschumiは以下のようにまとめている。以下の括弧の中は評者による補筆である。

重森三玲の生涯はつぎの通りである。三玲は岡山県上房郡吉川村［現在は

加賀郡吉備中央町吉川］に1896年［明治29年］８月に元次郎とつるのの長男として生まれた。親が付けた名は計夫（かずお）であるが，後に画家のジャン・フランシスコ・ミレーにあやかって自ら三玲と改名したものである。15歳からお茶とお花を習った三玲は自宅の庭を設計し，父の助けを得て作庭した。父の死後それに多少手を加えて1925年１月に完成させ，それを松頼園と称したが，これは京都・大徳寺大仙院の庭を模した石庭である。18歳にして初めて作ったのがこの庭と茶室天頼庵であり，現在でもその石組の一部は重森三玲生家跡に残っているし，茶室の方は吉川八幡宮の際に移築されている。

三玲青年は画家になろうと決心して上京，1917年東京美術学校本科に進み，日本画を修めた。しかし，その独特な抽象画的作品は全く認められず，失意のうちに日本画の制作を止め，美術史や美学や思想に入れ込んだ。その傍ら，東洋大学で印度哲学と東洋史を学んだ。そして，1920年に東京美術学校の研究科を卒業した。以上のような幅広い教養と基礎的修業を積んだ上で庭園研究に勤しんだ。三玲は1922年に越智マツエ（のちに鈴子（れいこ））と結婚した。

画家としての志が打ち砕かれた三玲は，「文化大学院」の構想を立て，「現代文化思潮」と題する小冊子を編集した。志を同じくする研究者の協力を得て，このような通信教育講座を出発させる構想を企て，自らも「現代美術思潮講義」，「現代哲学思潮講義」という講義録を執筆したのである。だが，1923年９月１日に突然起きた関東大震災のために，この目論見はあえなく頓挫した。

そこで，生家のある吉川に帰郷し，２つの注目すべき活動を行った。

１．1924年には，吉川八幡宮を「特別保護建造物」に指定にしてもらうべく奔走し，翌年その指定を受けた。

２．［1925年に自庭「天籟園」を改作し，］1926年に西谷宅などに庭園を作り，それらが作庭家・三玲の初期作品となった。

1929年には，これと言った当てもなく家族（妻と２人の息子）を伴って京都に移り住み，学者と文筆家としての一歩を踏み出した。それゆえ，家計は鈴子夫人の内助の功に拠るところが大きかった。三玲はその生涯に合わせて

62点の書物を著した。その分野は美学・生け花・茶道・茶室・庭園など多岐にわたっている。著者の Tschumi によれば，その内訳は52点は庭園（茶庭を含む）に関するもの，13点が生け花に関するもの，６点が茶道に関するもの，４点がその他の分野に関するものである。中でも，『日本庭園史圖鑑』（全26巻，1936～1939）と『日本庭園史体系』（全35巻，1971～1976）は，野心的な多巻本であり，他に類例を見ない出版物であった。前者の『日本庭園史圖鑑』（242庭を掲載）は全国の250を超す古庭園の実測調査に基づくものであり，今日でも資料的価値の高いものである。後者の『日本庭園史体系』は長男の完途との共著であり，完結を見ずに他界した。

表１　重森三玲の著作

著　作　の　分　野	点　　数	％
庭園に関するもの（茶庭を含む）	５２	６９．３
生け花に関するもの	１３	１７．３
茶道に関するもの	６	８．０
その他	４	５．４
合計	７５	１００．０

生け花の分野では，新興いけばな協会の設立を構想し，その設立起草文「新興いけばな宣言」は極めて革新的であり，話題となった。このような伝統にこだわらない自由な発想は，作庭の世界にも持ち込まれた。

三玲は茶道に関しても一家言をなしていた。少年の頃からお茶を習い，18歳にして天頼庵と称する茶室を設計し，それを父と協同で作ったほどであるから，生涯にわたって茶道をこよなく愛した。茶道には芸術の全てが結晶していると考えたからであった。

三玲は書も実践した。「庭」，「無」，「林泉」，「萬華」，「即妙」，「今」といった漢字を好んで毫毛した。その書を実際に見たい向きは，郷里の吉川にある重森三玲記念館に足を運ぶがよい。多数の作品が収蔵されている。

では，宗教についてはどのような考えをもっていたのであろうか。三玲は

長い間京都で生活したが，その間毎月27日には岩清水八幡宮に参詣したという。そして，同じ八幡系の神社・吉川八幡宮への思いを馳せ続けた。三玲は自然崇拝を含む神道を自らのよりどころとした。そして，神道の社になる岩磐・岩境こそが日本庭園の起源であると考えた。その好例が，兵庫県の神像寺裏山の岩磐や倉敷の阿知神社の岩境であろう。自らの作品では，四国高松の国分寺庭園や松尾大社の上古の庭に，そのような見方が如実に現れているのである。

三玲と鈴子は，５人の子ども（男４人，女１人）に恵まれたが，三玲はそれぞれにヨーロッパの学者や芸術家の名前を付けた。完途・弘淹・由郷・埶氐・貝崙である。それぞれ，カント・コーエン・ユーゴ・ゲーテ・バイロンと読む。［完途は作庭家，弘淹は写真評論家・東京総合写真学校理事長，由郷は舞踊家，埶氐は広告業を経てＧＥＩＴＥ事務所主宰，貝崙は映像作家となった。いずれも三玲のもつ芸術家肌を何らかの形で継承したのである。完途の息子が作庭家の三青，由郷の娘が邦楽家の三果，息子がモダンアートを専攻する三明である。］

三玲が円熟期にしたことは何か。1932年に京都林泉協会を設立し，会員仲間と共に庭園の研究を進めた。1961年には，その30周年記念の事業として，大徳寺瑞峯院に独坐庭を作庭した。今でもこの会は毎月庭園見学会を開き，会報『林泉』の発行を続けている。

古庭園の実測調査を始めた1938年には日本庭園研究所を創設し，自ら所長となり，研究部門とデザイン・造園部門に分けて仕事を進めた。庭園の調査から造園まで行ったのである。

戦時中の1943年に，三玲は吉田神社の社家［として名高い鈴鹿家所有の物件］を購入して引っ越し，亡くなるまでそこで過ごした。2007年現在，この重森三玲旧宅［のうち，書院と好刻庵と南庭（青石主体の枯山水）］は重森三玲庭園美術館（重森三明館長）として公開されている。

戦後1948年に，三玲は京都文化院賞を受賞した。日本庭園は勿論のこと生け花と茶道の分野での文化的貢献が認められたからである。翌1949年に三玲

は白東社（びゃくとうしゃ）と称する生け花研究会を設立し，月例研究会を自宅で行った。1950年には，『いけばな芸術』と題する雑誌を刊行し始めた。

戦時中には作庭をほとんど行っていないが，文筆活動は続け，戦後間もない1949年の一年だけで，9点の本を上梓したのである。その後，1950年代の初めには作庭を再開し，1953年までに注文のあった14庭を作り上げたのである。いずれの数字も戦前の三玲にはなかった，記録的な仕事ぶりであった。

1955年に西条（東広島市）の前垣邸庭園を造園した折りには，作庭家としての腕前は相当上達していた。1960年代と70年代には，友琳の庭の他，瑞峯院，石像寺，豊国神社，福智院，松尾大社などに代表作を残している。松尾大社3庭のうち，上古の庭が最期の作品となった。

では，以上のような三玲の作庭を近代日本の庭園の中でとのように位置づけられるだろうか。著者はROOTED IN PLACE AND CULTURE（pp.57）という章の中で作庭には3つのアプローチがあるという。つまり，

1．日本庭園の伝統を守る保守主義――例えば，小川治兵衛（植治）
2．伝統的技法をかなぐり捨てて，全く斬新な庭を作り出す近代主義――例えば，堀口捨己
3．近現代の庭園に伝統的技法を生かす方法――例えば，重森三玲

があるが，三玲はこの第3の道を採ったというのである。

TRADITIONAL AND NEW DESIGN ELEMENTS（pp.60～65）と題する章で，著者は多様な作庭技法を具体例を挙げながら精緻で明快な分析を行っている。三玲は，天の橋立・築山・漢字型（水・心）の池泉・想像上の動物（白虎・黒亀など）・遣水・借景・露地・刈込・島・神池・石組・ひもろぎといった伝統的手法を使った。その一方で，色付きセメントの使用，波模様・雲型模様・放射状の光線模様の創案，渦巻き状の配置，壁面の描画を試み，垣根に字模様を工夫したり，市松模様を取り入れたり，縞模様を入れたりしたのである。伝統を踏まえながらも，日本庭園の革新を推し進めたのが作庭家・重森三玲であった。――評者の私見では，伝統の継承に固執する造園家の保守主義を嫌って，日本庭園を前衛的な空間芸術に昇華させたのが

重森三玲その人であったと思われる。

本書の後半は，三玲の作庭した17庭の解説に当てられていて，写真とイラストがふんだんに使われている。著者の旧著（Tschumi 2005）と比べると，次頁にある表２のような対照表ができあがる（○は有，●は無）。なお，目次は前者が作庭の時系列順に掲載されているのに対して，後者は作庭の代表的特徴別（つまり，初期意匠・石庭・コンクリートの線・岩と砂・築山・伝統の革新）毎にまとめられていて，個々の庭の記述と解釈を行っている。

表２から，新著 Tschumi（2007）がいかに旧著の Tschumi（2005）よりも記述が詳細であるかが分かるだろう。しかし，三玲が200を超す庭を作ったのであるから，まだ氷山の一角を観察したにすぎない。評者にしても，2008年５月現在，表２の小河邸・興禅寺・龍吟庵・北野美術館・住吉神社・芦田邸を除く11個所の庭園を見ただけである。さらに多くの三玲作品を知りたい向きは，むしろ38個所の庭園を取り上げた重森埶氏ほか（2007）をお勧めする。中田（近刊）は100庭ほど紹介する点で現在のところ最も網羅的であるが，どの程度の分析と考察が含むかどうか不明である。いずれにせよ，単なる庭園紹介ではない，より組織的かつ体系的な庭園研究が望まれる。

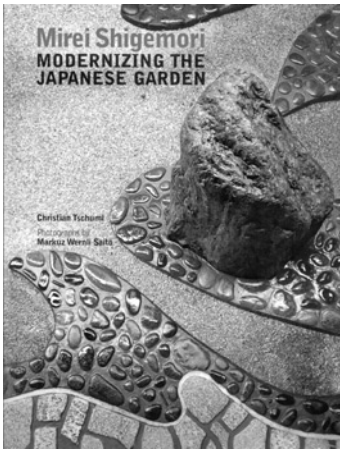
総じて，著者 Tschumi が重森三玲という生け花や茶道などに通じた庭園研究家・作庭家の生涯とその作品を詳しく英文で紹介し，国際的に知らしめた功績は大きい。この手の本が，重森三玲の子や孫ではなく，弟子でも友人でもない，外部の第３者，それも海外の研究者によって初めて書かれた点を歓迎したい。というのも，三玲本人とは距離を置いた客観性が担保されるからである。

日本庭園の伝統を踏まえながらも，前衛いけばなからモダン枯山水へという特定の芸術ジャンルを越えた文化運動を試み，草月流創流の勅使河原蒼風，彫刻家のイサム・ノグチらとの交流を行うなど，多彩な活動をした重森三玲という優れた文化人とその業績は，改めて検証・評価すべき対象として浮かび上がった。本書 *Mirei Shigemori－Rebel in the Garden* によって，三玲の庭園は単なる造園法の域を越えて，庭園文化史と芸術運動の流れの中でダイ

表 2　Tschumi（2005）と Tschumi（2007）の比較

	Tschumi（2005）	Tschumi（2007）
判型	A5判（22㎝×17㎝）	大判（34㎝×15㎝）
装本	ペーパーバック	ハードカバー
総頁数	128頁	202頁
はしがきの有無	●	○（4名が寄稿）
序論または総論	16頁（pp. 8 ～23）	42頁（pp.25～67）
庭園の記述	91頁（pp.24～115）	119頁（pp.68～187）
庭園（作庭時期）	10個所*	17個所*
春日大社，1934	●	○
東福寺，1939	○	○
岸和田城，1953	○	○
前垣壽男邸，1955	●	○
小河松吉邸，1958-1965	●	○
瑞峯院，1961	○	○
興禅寺，1963	●	○
龍吟庵，1964	●	○
北野美術館，1965	●	○
住吉神社，1966	○	○
友琳の庭，（1969）2002	○	○
天頼庵，1969	○	○
芦田末次郎邸，1971	●	○
石像寺，1972	○	○
豊国神社，1972	○	○
福智院，1973	○	○
松尾大社，1975	○	○
あとがき	○	●
註	巻末註	脚註
付録	年譜，庭園連絡先，所在地の地図，用語	用語，年譜，庭園と著作，参考文献，挿絵の著作権

*同じ境内や邸宅に複数の庭が作られている場合があるので，庭の数を正確に示しているわけではない。例えば，三玲は東福寺方丈には 4 庭，瑞峯院には 2 庭作った。



ナミックに捉える視点が提供されたと言えるだろう。

再読して改めて感心したのは，三玲が幼い頃から茶道と華道を学び，茶室などの設計も行い，書を心得，陶芸も嗜みながら，日本画家として出発し，新生いけばな運動を主宰し，たびたび茶会を催した事実である。その一方で庭園史の調査研究と作庭に打ち込んだのであるから，三玲研究はその庭園だけに焦り込んだのでは一面的であろう。このようなスケールの大きい人物の研究には，多様な日本芸術の諸領域がいかにして三玲という文化人の形成に係わったかを深く追究しなければなるまい。本書を含め，最近作庭家・重森三玲の最評価が進んではいるが，では，前衛いけばなや茶道や茶室建築などの世界における三玲の評価はどうなのか，知りたいところではある。

追記　評者はこの十余年自庭をつくりながら，庭園に対する興味をつとに深めてきた。三玲に対する知的関心は冒頭に記したテレビ番組の視聴，展覧会鑑賞，三玲庭園紹介書の閲覧に終わらず，重森三玲顕彰記念式（吉備中央町重森三玲顕彰記念実行委員会主催，2008年３月30日，吉備中央町吉川公民館）への出席や「重森三玲のモダンな庭を体感する旅」（2007年に２回そして2008年に５回，企画催行・山陽新聞旅行社）などへの参加という形で進んできている。このような小評を試みたのもその一環である。――岡山在住の作庭家・岩本敏男によれば，晩年重森三玲は楯築遺跡の巨石群（倉敷市庄新町）を「岡山の彼女」と呼ぶほどに惚れ込んだという。そこで，過日評者がこの岩磐を訪ねた折り，三玲に想いを馳せて作った駄句を加えて小稿を閉じることにしよう。

天を指す　巨石を撫でて　枯山水　　庭斎

（はしうち・たけし／国際教養学部教授／2008年５月13日受理）